
バカと幻夢と召喚獣

米田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと幻夢と召喚獣

【Nコード】

N3118Z

【作者名】

米田

【あらすじ】

浮雲大和は、文月学園に転入したがあるミスをしてFクラスに。そして試召戦争に巻き込まれていく。

この小説は明久×瑞希、オリ×優子の夢小説です。

主人公設定（前書き）

この小説は明久×瑞希です。それ以外のカップリングが好きな人はバックしてください。

主人公設定

主人公設定

浮雲 うきぐもやまと 大和 十六歳

家族構成 父 母 祖父 兄弟 妹二人の9人家族。

好きな物 仲間 漫画

嫌いな物 孤独 仲間を大事にしない人

得意科目 日本史と古典に現代国語。古典と現代国語は常に500点台。日本史は調子が悪くて1000点だという……。他の教科はほとんどが400点台。

苦手科目 保健体育、世界史。保健体育は200点台だが、ほとんどが体育の中から。世界史に至ってはギリギリ二桁。

見た目 黒髪に黒目。本人は気がついていないが意外にモテる。

ある事情で、引越してきた。兄のすすめで文月学園に特待生で転入するが、ある失敗をしてFクラスに。また、春休み中に優子と明久に会っている。優子にはあったときに間接を外された。明久とは意気投合し、友だちになった。

明久が瑞希のことを好きなのを知っていて応援している。ちなみに、大和は自分のことについては鈍感。

そして、家では仕事で家にいない両親に代わり、弟たちの面倒を見たり家事をしている。

また彼は幻夢流という剣道の流派の後継者。いつも幻夢という刀（見た目竹刀）を持っている。また、喧嘩の強く、その強さから鬼神と呼ばれている。また、幻神という二つ名がある。

幻夢流 幻覚を使い相手を欺き、戦う流派。移動術もあるらしい。また、大和も知らない奥義があるらしい。

幻夢 幻夢流の後継者が必ず持つ刀。大和は普段見た目を竹刀にしている。また、”染まれ 幻夢”と叫ぶと刀が赤く染まり幻術が強化される。それと同時に大和の目は赤く染まる。また刀の色は人によって違う。幻夢には第二形態がある。

召喚獣 装備 大和をデフォルトした姿に和服（大和の意志により鎧にもなる）に幻夢。

腕輪 ミラーシユ 蜃気楼 幻覚を見せる腕輪。

特殊能力 学園長が特待生という事で大和に三つの特殊能力を与えた。

一つ目召喚フィールドの作成。二つ目フィードバックを付けたり無くしたり。三つ目召喚獣を物に触れさせる事ができる。

原作と違う点

吉井明久 大和と出会って、勉強を教わり、成績は良くなりAクラスレベルに。また、大和の祖父に才能があると言われ、幻夢流を習って喧嘩も強くなった。

主人公設定（後書き）

どうも、作者の米田です。監視者と平行して更新していきます。よろしく願います。

第一話「出会い その一」

大和Side

「1111、ど1111?」

俺、浮雲大和は道に迷っていた。色々な事情でこの町に引っ越してきた。兄のすすめで文月学園に入学する事になったのだが……。今日は学園長に呼ばれ、文月学園に行くことになったのだが、文月学園に行く道が分からない。

「どうするかな……。うん?」

ふと、数メートル先を見ると不良達が何かを取り囲んでいた。

『なあ、姉ちゃん俺達と遊ばないか?』

『嫌よ、離しなさい!』

どうも不良達が嫌がってる女の子を無理矢理連れていこうとしているらしい。

「……………助けてやるか」

俺は不良達に近づき、一人の不良の腕を掴んだ。

「おい、やめろよ。嫌がってるだろ」

「ああ、何だ手前は」

何だって言われてもな……。

「取りあえず、通りすがりのヒーローって名乗っておこうかな」

「な！？ ふざけてんのか？」

不良の一人が殴ってきたが、俺は半歩下がって避けた。そして不良の腹に拳を叩き込んだ。

「ぐおっ！？」

「て、手前！！」

不良の仲間二人が俺に殴りかかってきたが、不良は、俺がいない所に拳を向けた。俺は不良の一人には蹴りを、一人には拳をお見舞いした。

「な、何なんだよこれ？」

「説明しても良いけど、分からないと思うよ」

「く、覚えてろ！！！！」

うん、漫画の悪役みたいだね。

「さてと、どうするか？」

「ねえ」

早く文月学園に行つて早く用事を終わらせよう。

「ねえ」

でも、行き方分からないんだよね。ああ、早く帰つてフェアリーテイルの続き読みたいな。

「ねえ」

さてと、どうするか……。

「……人の話を聞きなさいよ!!」

ゴキンっ!!

「グワツ!! 俺の間接が!!」

何だ? 何が起きたんだ!? 取りあえず。

ゴキン。

「ふう、元に戻った」

「……無視しないでよ」

うん?

後ろを振り返ると……。

「……」

「何よ」

凄く可愛い女子がいた。

「嫌、別に」

「なら、良いけど」

「つつかこの子が間接を外したのか？」

「取りあえず、ありがとう」

「嫌、別にお礼なんていいよ」

「そっか？」

まあ、良いか。そんな事より。

「あのさあ、ちょっと聞きたい事があるんだけど良いかな？」

「うん？ 何？」

「文月学園に行くにはどうしたら良いかな？」

「それなら、この道をまっすぐ行って信号の所で右に曲がって、更に真っ直ぐ行けば着くわ」

「そっか、ありがとう」

助かった……。

「ねえ、あんたも文月学園の生徒？ 会ったこと無いんだけど？」

「ああ、俺は転校生だから。君も文月学園の生徒なんだ」

「ええ、アタシは二年生になるんだけど、あんたは？」

「俺も二年生だ」

同じ二年生なら会えるかもな。

「へえ、そうなんだ。アタシは木下優子。あんたは？」

「俺か？ 俺は浮雲大和」

また、会えるかな？

俺は、文月学園に向かった。

優子Side

「浮雲大和か……」

アタシが不良に絡まれていたのに誰も助けってくれなかった。だけど浮雲君は助けてくれた。

「優しいな」

しかも、格好いい。

「転校してくるって言ってたけど……。また会えるかな？ ってアタシ何言ってるの!？」

アタシは頬を赤くした。

大和Side

俺は、今文月学園の学園長室にいた。

「アンタが、今度三年生の主席になる浮雲湊人の弟の浮雲大和かい？」

「は、はい、そうです」

……何か緊張するな。

「さすが、主席の弟さね。去年の学年主席をぶち抜いた成績さね」

「はあ」

「本当ならあなたが学年主席なんだけど……。世界史のテストを名前を無記入したら意味が無いさね」

「畜生!?!?!」

何か忘れてる気がしたんだよな。

「まあ、アンタはFクラス所属になった訳だけど、これから試験召喚戦争が起こるかもしれないから、がんばるんさね」

「は、はい」

そうか、そう言えばそんなのがあったな。

「所で、世界史なら今すぐ補給試験を受けることが出来るけど、どうするさね？」

「う、受けます」

……一時間後。

「これは酷いできだね」

「放っておいてください」

世界史は十五点と酷かった。

「他は良いんだけどねえ」

「へいへい」

「所で、アンタに特殊能力を与えてやるうと思っただけど、どうさね？」

特殊能力か……。もらえるなら欲しいかも。

「お願いします」

「じゃあ、アンタに特殊能力を与えるよ。まず、召喚フィールドを

作る力。次に召喚者に痛みของフィールドバックを与えたり、無くしたり出来る能力。あと、召喚獣を物に触れさせる事が出来る能力」

……使えるのかな？

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、早速召喚フィールドを作ってくれ」

「はい、どうすればいいですか？」

「アウエイクン起動と叫びながら科目の名前を念じれば良いさね」

「じゃあ、古典でやります。アウエイクン起動!!」

出来るかな？

「サモン試験召喚獣」

そうすると、魔方陣見たいのが現れた。そして、俺の召喚獣が出てきた。

「おっ、成功さね」

「これが俺の召喚獣……」

召喚獣は和服に日本刀を装備した召喚獣だった。

古典 浮雲大和 699点

「ちなみに、注文通り、装備は幻夢にしといたよ」

「あ、ありがとうございます」

そして、俺は手をかざした。

「来い、幻夢」

すると、日本刀が現れた。幻夢、それは俺が持つ、刀。幻夢流の後継者が持つことの出来る刀。

幻夢流とは、幻覚で敵をあざむく流派。あの不良を倒したのも幻夢流だ。

「何というか、大変な事になりそうだな」

俺はそう思った。

第一話「出会い その一」（後書き）

作者の米田です。

今回は優子と大和が初めて出会った話です。

次回は明久も出ます。瑞希も少しだけです。

次回の前に監視者を書きます。

第二話「出会い その二」

大和Side

「さーてと、この後どうしようかな」

今、俺は用事を済ませブラブラしていた。

「買い物でもして帰りますかな……ん？」

『誰か、その人を止めて!!』

前から自転車に乗った男が現れて、明らかに女物だと思われる鞆を持っていた。引ったくりだな。

よし、今回も助けるか。

そう思ったが、俺の前に行動する人がいた。俺と同じくらいの年の俺より背の小さい男だった。

その男は自転車の男に飛びかかったが、すぐに吹っ飛ばされた。
…弱くないか？

すると、自転車の男は逃げようとした。だが、俺はそんな男を逃がそうとはそない。

俺は自転車男の後ろに近づき、首に手刀を叩き込んだ。そして引ったくりは倒れた。

「へぶっ!!」

「たく……引ったくり何かするからだ」

そして、俺は倒れてる立ち向かった男に手を差し伸べた。

「大丈夫か……?」

「うん、大丈夫。っと」

男は立とうとしたがまた倒れた。

「どうした?」

「……お腹すいた」

二十分後。

俺は、今公園にいる。(先ほどの引ったくりは常習犯だった)

「おいしい、おいしいよ」

そして、俺の目の前には笑顔で百円おにぎり×10個を食べてるやつがいる。うん、笑顔で百円おにぎりを食べる人初めて見た。

「僕は、吉井明久。君は?」

「俺は浮雲大和。大和って呼んでくれ」

「うん。僕も明久って呼んで」

明久か、こいつ勇氣あるよな。

「しっかし、よくあんな無茶したね。お前も相手と自分の力の差は分かってたろ？」

「まあね、でもああいう人が許せなくてつい」

「そうなんだ」

「所で、大和は高校生？」

「ああ、文月学園の二ーFだ」

「へえ、そうなんだ……って二ーF？」

うん？ どうした？

「実は、僕も二ーFなんだよね」

「そうなのか？」

「うん」

「ちなみに、点数は学年トップだったぞ」

「ええ！！？ そうなの？ あの霧島さんより点数が高いなら何でFクラスに！？」

うん、そんなに驚くことか？

「ちょっと、試験で失敗して……」

「そ、そうなんだ……あ」

「どうした？」

明久の視線の先を見て一人の女の子がいた。

女の子は背中まで届く髪が特徴的な女の子だ。年は俺達と同じ年齢みたいだ。

「姫路さん……」

「明久、あの子は？」

「えっと、彼女は姫路瑞希さん。僕と同じ文月学園の二年生。Fクラスに入る予定なんだけど……」

そして、明久が顔を曇らせた。

「どうした？」

「実は、姫路さんは振り分け試験の時途中退席してFクラスになったんだ」

「そうなのか？」

「うん、ウチの高校はそう言うのが厳しいからね。姫路さんは本当ならAクラスに入れるけどね。……僕は実力でFクラスなんだけど、

姫路さんは本当ならAクラスに入れたんだ」

そうして、明久はつらそうな顔をした。

「だから、僕は一学期が始まったら試験召喚戦争を起こそうと思ってる」

「なるほどな、姫路のためか……」

ギクツッ！！

「そ、それは」

「なるほど……。姫路の事が好きなんだ」

「う、うん。だから、大和。僕に勉強を教えてください？」

「……好きな人のためにがんばるか……。なるほど、気に入った。明久、お前に勉強を教えてやる」

「ほ、本当？」

「ああ、だけど世界史と保健体育は教えられないからな」

「分かった」

……何か楽しそうになりそうだ。

それから、……

「ただいま」

俺は家に帰ってきた。

「お兄ちゃん、お帰り」

「おう、ただいま」

帰ってくると、一番下の弟と妹の秀人と香奈がお出迎えしてくれた。

「兄さん、お帰り」

「おう」

下の弟と妹の英人と華も出迎えてくれた。

「さて、……晩飯でも作るか」

俺の家は普段、親父とお袋は仕事でいないから俺と湊人兄で家事をしている。

そして、祖父、湊人兄を加えて晩飯を食べた。

「今日さ、不良に絡まれた女の子を助けたんだけどさ、可愛かったんだけど……その子に間接を外された」

「うん、大和が女の子の事話すなんて珍しいな」

「うん？ そっ？」

そんな事はないと思うけど……。

「で、その子見てどうだった？」

？ 湊人兄がニヤニヤしながら聞いてきた。

「可愛いと普通に思ったよ。あと、胸が痛くなったな……」

「ほほう、それは恋だね」

「ぶっ！！」

お茶を思いつきり吹き出した。

「こここ恋なんてあり得ないだろ？」

「そうか？ 人は恋すると胸が痛くなるって言うぞ」

「そ、そうなの？ 俺分からないんだけど……」

「……お前は真剣に恋したことが無いからな」

恋か、恋なのかこの感情は……。

第二話「出会い その二」（後書き）

どうも、作者の米田です。

最近風邪をひいて辛いです。

……明久の腕輪をどういう能力にすればいいか迷っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3118z/>

バカと幻夢と召喚獣

2011年12月14日15時53分発行